

平成 23 年度中部環境パートナーシップオフィス運営業務 E S D 関係事業報告書

平成 23 年度 ESD フォーラム 2011

「2014 年に向けていかに歩むか」

平成 24 年 3 月 31 日

特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ

目次

1. 業務概要	2
2. 業務報告	3
2-1. プログラム	3
2-1-1. 主催者あいさつ	
2-1-2. プレゼンテーション	
2-1-3. 基調講演	
2-1-4. 2005年～2011年 ESD ムーブメント総括セッション	
2-1-5. 今後に向けて	
2-2. 業務総括	24
3. 参考資料(別添)	
3-1. ESD フォーラム 2012 参加者アンケート	
3-2. 及川幸彦氏 作成資料「気仙沼の教育復興と ESD」	
3-3. 竹内恒夫氏作成 資料国連「ESD の 10 年」と中部 ESD 拠点の取り組み	
3-4. ESD フォーラム 2011 成果 (一覧表)	

1. 業務概要

(1) 趣旨

2005年にスタートした「国連持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」キャンペーン。2014年の最終会合まであと3年あまりとなった。ESD10年の仕上げの時期に突中した今、これまでのESDムーブメントやシステムづくりにおける成果と課題を共有し、2014年までに何をすべきか、多様なセクターとロードマップづくりを行った。特に、最終会合の誘致を表明した愛知・名古屋がESDイニシアティブをとってどう動くか、ESDに関わる皆さまと具体性のある議論を交わした。

また、3月11日に起きた東北大震災の被害を受けた気仙沼市、日本のESD先進地である気仙沼市教育委員会の実践報告及び震災後の教育復興についての基調講演を受け、今後のESD実践に向けての議論を深めた。

(2) 実施概要

日時：平成23年9月3日（土）14:00～17:30（開場13:30）

場所：中部大学名古屋キャンパス

参加者：49名

主催：環境省中部環境パートナーシップオフィス 中部ESD拠点協議会

後援：愛知県、名古屋市、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、国連大学高等研究所（UNU-IAS）

(3) プログラム

主催者挨拶 竹内恒夫（中部ESD拠点協議会運営委員長）

新海洋子（中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー）

プレゼンテーション

「最終会合に向けて」大野康史氏（愛知県産業労働部 観光コンベンション課）

「国連ESDの10年と中部ESD拠点の取り組み」竹内恒夫（中部ESD拠点協議会運営委員長）

基調講演「気仙沼の教育復興とESD～気仙沼の未来に向けたESDの展開」

及川幸彦氏（気仙沼市教育委員会副参事兼指導主事 政府・国連ESDの10年円卓会議委員）

2005年～2011年ESDムーブメント総括セッション

「何を実現したか～愛知なごやのポテンシャルの共有」

報告者	ネットワーク	中部ESD拠点協議会 なごや環境大学	竹内恒夫 加藤正嗣氏
	学校教育（高等教育）	愛知県総合教育センター 愛知教育大学	井中宏史氏 榊原洋子氏
	企業	小林クリエイト株式会社 ブラザー工業株式会社 株式会社フルハシ環境総合研究所 ユニー株式会社	池田和広氏 花木峰生氏 浅井豊司氏 百瀬則子氏
	NPO/NGO	中部ESD拠点推進会議	浅田益章氏
	行政	愛知県・愛知県教育委員会・名古屋市・名古屋市教育委員会	

●全員参加ワールドカフェ「2014年までにすべきこと～ロードマップ作成のための素材抽出」

●まとめと今後に向けて

2. 業務報告

2-1. プログラム

2-1-1. 主催者挨拶

竹内 恒夫（中部 ESD 拠点協議会運営委員長）

本事業は中部 ESD 拠点協議会と中部環境パートナーシップオフィスの共催、愛知県、名古屋市、各教育委員会、ESD 拠点の認定をしている国連大学高等研究所の後援を得て、実施に至った。2014 年に向けていかに歩むかをテーマに最終会合に向け、現状を共有し、残り 3 年の行動計画を作成するための意見を交わすことが趣旨である。十分ご議論、ご提案いただきたい。

新海 洋子（中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー）

本事業の目的は大きく 2 つです。日本の ESD の先進地であり、3 月 11 日の東日本大震災の被災地である気仙沼市から及川幸彦氏をお招きし、これまでなされた気仙沼の ESD 実践について、そして被災後の現状についてお話を伺い、我々が今後どのような ESD 実践を進めるか、2014 年の最終会合までに何を達成するか、この地域に何を残すか、そのために何をするかをについて多様な主体と意見を交わし、共通項を出し合うことである。

2-1-2. プレゼンテーション

「最終会合に向けて」 大野 康史 氏（愛知県産業労働部 観光コンベンション課）

愛知県と名古屋市共同で最終年会合を誘致したいということで活動しているが、これまでの経緯についてご説明する。今年の 1 月 4 日に、愛知県の神田前知事が誘致意思を表明した。その後 2 月に岡山市長が表明した。当初、文科省からは、年度内に開催場所を決定すると言われていたが延びている。地元では 3 月に関係者による誘致準備委員会を立ち上げ開催提案書の作成のために、地域の関係者の英知を結集しようと、4、5 月の 2 カ月を費やした。

6 月 30 日が提出期限となり、北海道・札幌市、浜松市、神戸市、岡山市、北九州市、大分県、愛知県・名古屋市の合計 7 地域が提案した。8 月 3 日にユネスコ国内委員会があり、この時に文科省の課長補佐が口頭で、8 月中に決定したいと言われた。これが文科省の公式見解である。8 月 24 日には、有識者による選定委員会において、7 地域が開催提案を行ったが、愛知県は副知事がプレゼンテーションを行った。

その後追加質問があった。1 点目は、教育振興計画にどのように ESD の取組が記述されているか、2 点目は、どのようにユネスコスクールの登録校を増やしていくのか、という質問が来て、昨日提出した。それにあわせ、文科省に確認したところ、ユネスコ総会が 10 月に開催されるので、9 月中にはなんとか決めたいと返答があった。今も全力で取り組んでいる。引き続きご支援をお願いしたい

「国連「ESD の 10 年」と中部 ESD 拠点の取り組み」竹内 恒夫（中部 ESD 拠点協議会運営委員長）

* 地球憲章と ESD

* ESD に関する地域拠点とは

* 中部 ESD 拠点の取組み

2-1-3. 基調講演「気仙沼の教育復興と ESD～気仙沼の未来に向けた ESD の展開」

及川 幸彦氏（気仙沼市教育委員会副参事兼指導主事 政府・国連 ESD の 10 年円卓会議委員）

気仙沼市では豊かな自然を活かした環境教育を機軸に、小・中・高校にて、さまざまな教科をつなぎながら、また地域の NPO や大学などとも連携しながら、豊かな学びの場をつくっていらっしゃいます。及川先生はこの取り組みを面瀬小学校で作りあげ、その後、気仙沼市教育委員会にて ESD を市内へひろげる横展開と、小・中・高をつなぐ縦展開に積極的に取り組みました。そして、再び気仙沼市中井中学校の教頭先生として現場での教育実践に取り組まれていました。3月11日、気仙沼市中井中学校での被災。及川氏がいかに地震・津波から子ども達を守ったか。そして今年度の異動で、教育委員会に戻り、気仙沼の教育復興への取り組みを始められています。

はじめに

みなさん、こんにちは。気仙沼からまいりました及川です。よろしく申し上げます。ご存知の通り、気仙沼は今大変な状況にあります。ですが、私が今日ここに伺った理由は大きく 3 つほどあります。1 つは、3月11日の東日本大震災の後、全国の多くの方々から気仙沼は多くの支援を受けています。特に気仙沼は ESD を通じて国内外を含め多くの地域と繋がりを持っており、非常に大きな支援をいただきました。この中部地域、名古屋を中心とする地域からも気仙沼に乗り込んできてくれましたし、先生方もボランティアに来て下さいました。大変多くの支援物資等もいただきました。私の一つの役目として、ある程度落ち着いたらそういう方々に恩返しをしなければいけないと思っています。しかし、気仙沼で恩返しができることといってもそんなにないんです。せめてこうやって繋がりあるところに直に伺って御礼を申し上げたい。それが何よりも大きな理由の一つ、モチベーションの一つです。

今週月曜日は大分県の大牟田市に行ってきました。大牟田市はユネスコスクールを非常に盛んに取り組んでいます。大牟田に気仙沼から転校生が行っていたりして、同じような話をしてきました。これが大きな動機の一つとして、改めて御礼申し上げます。

2 つめは、名古屋、中部と我々気仙沼は日本の ESD の中では盟友として、これまで一生懸命牽引役を担ってきたという自負があります。そういう関係の中

で、我々の仙台広域圏、特に気仙沼の取組について、皆様に情報を提供することで何かお役に立てることがあればという事と、私としても皆さんからいろんな事を学んで持ち帰り、気仙沼、仙台広域圏に活かしていきたい。今後、2014 年に向けてのロードマップ、あるいはポスト 2014 年を含めて、持続可能な ESD というのが私のテーマであり、ESD そのものが持続可能でなければ話にならない。ESD の SD をきちんとするために組織的に実践している名古屋、特に 14 年の開催地に名乗りを上げている名古屋を参考にさせていただきたいというのが 2 つめの動機です。まさに SD の学びあいです。

3 つめは、これはまた大きな話で 1 つめの裏返しなのですが、今回の震災で私たちはある意味、価値観というか、我々の人生そのものが変わってしまった、ということがあります。ESD の進め方についてのパラダイムシフト、価値の転換があったと私は思っています。これは教育そのものの転換といってもいいかもしれません。そういう中で我々が経験した様々なこの出来事がいつの日か他の地域、あるいは世界で役に立つことがあれば、それは我々として発信していくべきだろうと常日頃から教育長と話しています。小さな力ですが、我々にとっては負った宿命ですので、少しでも貢献できれば、非常に重要な 1 つの役割だと思えます。そういう意味で、このように地域を回る、あるいは国内外のシンポジウム等もオファーがあればできる限り出かけることとして

います。

初めてお会いする方、懐かしいお顔で拝見する方、多々いらっしゃいますが、簡単に私の自己紹介をします。私は基本的に現場の人間ですので、野田首相がどじょうだ、泥臭い内閣だと言いましたが、あの人たちが泥臭かったら我々はどうなるんだと思っています。地べたを這いつくばったアリか、という話になります。現場の教員です。基本的には学校現場で、面瀬小学校で、2002年頃、くしくも小泉元首相がヨハネスブルグでESDを提案した時期からESD的な取組をはじめ、その後、教育委員会に移りRCEであるとかユネスコスクール、そういうものを地域で進めようと役割を担いました。その後また現場、学校に戻って、さらに裾野を広げようと実践していたのですが、今年の3月11日に地震が起きて、その20日後に教育委員会から招集がかかり、再び教育委員会に戻りました。教育委員会に身をおいて教育復興、震災復興に取り組んでいるというのが気仙沼地域での私の役割です。

また、広域的にいえば仙台広域圏がRCEですので、2005年6月、ちょうど愛知で地球博が行われた時に認定されたのですが、その時から関わっていて仙台広域圏の運営委員をしています。最近なかなか動けないですがやらせていただいています。

また、環境省が進めているプラスESDプロジェクトの制度設計委員、その後の評価委員として関わっています。ESDの国内実施計画の改訂をしている政府の円卓会議、内閣官房が中心になって11省庁が主催し各分野の、セクターの代表が集まって色々施策を検討する会議ですが、そのメンバーにもなっています。しばらく開かれてないですが、今は国内実施計画の改訂に震災の部分を入れようという話もあり、今日の話はつながると思います。皆さんの運命を担う2014年の会議の内容についても円卓会議で議論しています。

いろんなところでつながりを持たせていただきながら、地域で或いはもっと広いエリアで、いろいろな取組を実践していますが、基本は地域であり、私

にとっては子どもなので、常にそこをベースに発想しています。

今日は、前半に気仙沼でのESD実践についてお話し、中盤にはESD、RCEも含めた推進体制作りについて、最後に我々が経験したその大震災においてESDがどう機能し、或いはこれからどのようにESDを機能させていくのか、という話を1時間ぐらいいただきお話しします。

いろんな立場でいろんな興味を持っていらっしゃると思うのですが、私の話が全てフィットすることはないと思います。つまみ食いしていただき、そのとおりでなってしまうところがあれば嬉しく思います。いや違うと思われることもそれはそれで嬉しいです。情報を選択しながら聞いていただきたいですし、私が思うに、教員だから教員の部分だけ知っていればいいという時代ではありません。ESDを実践するなら学校の枠を超えたものをきちんと知っておかなければいけないですし、逆にNPOも学校のことを理解していただかないと、学校とNPOは一緒になかなかできない。お互いに両方が垣根を超えるという意味でホリスティック、インテグレイト、総合的に物事を見て進めていくのがよいのではと経験上思います。

気仙沼の未来に向けたESDの展開

最初に気仙沼について若干紹介します。これが気仙沼の地図ですが、行ったことがある方いらっしゃいますか。ここが気仙沼ですが、この辺りはずっと沿岸地帯、津波でやられてしまいましたが、この北東部岩手県の食い込んだところ、これが在りし日の気仙沼です。これは気仙沼湾を市街の丘のうえからとった写真です。リアス式海岸の美しい景観です。森と川と海が1つの地域にコンパクトにあって、それを水がなぎリアス特有の景観を持っています。このとおり国立公園の中ですので、観光と日本有数の漁港として、水産業の街というイメージだったのですが、その中で環境や食をテーマにESD的なアプ

ローチをする取組がありました。「森は海の恋人という運動」をご存知でしょうか。教科書に載ってはいるのですが、教員研修で聞くとあまり知られていません。畠山さんがはじめて、今は京大の客員教授をされている、この運動のリーダーに畠山重篤さんという方がいらっしゃいます。この運動は漁師が山に木を植えるという突拍子もない発想から始まったのです。この運動から学ぶべきところは、今まで漁師は海しか見ていなかったし、農家は田んぼしか見ていなかったし、山の人は山しか見てなかった、それを統合的にみるという発想です。これからの時代にこの発想が一致したということです。

それからスローフード都市運動。気仙沼は漁港です。水産物にことかかない。市場があり非常に食材が豊かです。食材の豊かさがまちづくりのメインテーマになっています。気仙沼は日本で初めてスローフード都市宣言しています。学校教育でも食育を非常に重視していて町の政策とも合致した。

また世界有数の漁港ということで国際水産文化都市になっています。漁船は世界の7つの海、北極海以外は全部行きます。地中海にも行っています。漁業を通して世界、海外とのつながりがあった。東京よりもアメリカや世界の海が近いかな。

そういう町の状況を背景にして、気仙沼は今から5年前くらいからESDとは意識せずにESDを始めていた。その後文科省からユネスコスクールどうですか、という話があって、それは何ですか、というところから始まり、あまりメリットやインセンティブを感じていなかったのですが、半信半疑で校長先生方にお話ししてユネスコスクールの数をどんどん増やしてきた、気仙沼が進めている取組をESDという概念を据えてさらに推進するという形になった。言葉が悪いかもしれませんが、ユネスコスクールというツールを使って公共力を持ってESDを推進するというアプローチです。現在、幼稚園が1園、小学校は21校中20校、中学校も13校中12校と登録していない学校が各1校しか残っていません。高校は2校ということで計35校、パーセンテージで言うと95%以

上登録しています。数的にはまだまだ日本一を保っているのではないかな。そのうち、金沢とか大きい町の登録数が増えると思いますが、今のところは少し優位性を保って、まだメッカと言えるかなと思います。これからその事例を簡単にお話します。

最初は面瀬小学校という私がいた学校から始まりました。当初はESDなんて考えてもいませんでした。6年生の未来都市プロジェクトという、日米教育委員会フルブライト奨学金プログラム使って国際環境教育がスタートでした。我々が考えたのは、最近ESD実践をする際によく耳にする、ホールスクールアプローチです。ESDを学校教育、教育活動全体で推進するというアプローチで、奈良教育大学が主導となって進めているのですが、我々は最初からホールスクールアプローチを実践していました。つまり全校対象にして学習カリキュラムを作成します。何故かという、今までの環境教育、つまり国語、算数、理科、社会といった教科以外の教育は、個人の力量やセンスに頼っている部分が多かった。優秀な事例のよくある問題は、熱心な先生の実践で終わってしまいい次につながらない、という点です。先生が異動するとその授業が終わる、ということでない。持続可能性という価値観は1年とか2年では身につくものではない。そう簡単にできたら誰も苦労しないです。ユネスコもそのことをきちんとやっている。人生のある限られたステージで身につくものではない。そうになると、1~6年まで体系的に組み立てて実践するというシステムがどうしても必要となる。6年間でも実は足りないくらいです。我々は今までの反省にたって、どの先生がどの学年を担当してもある程度持続的に発展的にESD実践ができるようにしたい、しかも地域の素材を活かして実践したい、と始めました。学年ごとにテーマをきめ、学年同士で意見交換・交流をし、発達段階にあわせた形で全学年を通した体系的なプログラムを作りました。

面瀬小学校では1、2年生は植物栽培をテーマにし

た体験学習です。3年生からは水辺環境をテーマに、体験学習から探究学習に入ります。川をテーマに人のつながり、生き物とのつながりを探究する授業内容に発展します。子どもたちが自分で探究するプロジェクトを実施します。調査したり、実験したり、自分で思考したり、表現したりしながら生きものとのつながり、或いは生き物にとってふさわしい環境を探究する。4年生ではサンクチュアリ、聖域を作ろうと、生き物の聖域、暮らしやすい環境を作ろうというアプローチをします。5年生になるともっとエリアがひろがって川だけでは満足しないので、地域の素材を活かして海をテーマに「海のミュージアム」プロジェクトを実施します。海の生物の多様性を調査すると、川など及びもつかないくらいすさまじい海の生物の多様性に体感します。それも地元の専門に学んでいる高校生に教えてもらいながらです。このように、森川海というつながりを子どもたちが体感し、重要なのは生きものだけではなく、生態系の一番上に人間がちょっと乗っかっているんだということに気づくことです。つまり人間の生きる営みはその生態系に乗っかって生かされていることを子どもたちは一年かけて学ぶのです。最後の授業ではマグロを解体し、マグロを使った料理教室を行います。ただおいしくいただくという楽しみだけではなく、生態系の頂点にいるのはサメやマグロであり、それを食べている人間、自分がある、様々な森と海の体験をしながら、最後に食事で我々が恩恵を受けている、気仙沼の産業がこういう生態系の中で育まれていることを学ぶ。ごく当たり前のことを当たり前に子どもたちが理解する。今子どもたちは分断された社会の中で生きています。刺身はパックで売られていて、刺身の先を見る機会がなかなかないわけです。実際、マグロを解体するところを見たり、最終的にマグロ一匹を解体し料理し食する。それを実感する。そんなプロジェクトを行っています。マグロを食べるまでにどれくらいかかるかというと1年かかります。このプロジェクトが最終的にマグロにたどり着くまでに1年かかるんです。簡単においしいものが

得られるというキセル学習ではないということです。授業参観の親の出席率が非常に悪いんですが、毎年マグロの料理教室だけは親が100%出席するって有名です。

このように地域の素材を活かしながら紡ぎプログラムを編み込んでいくことが重要だと思います。料理教室は総合学習の時間でいろいろと実践されているのですが、気仙沼が唯一威張れることは長く続いていることです。始めたのは20世紀後半ですから、もうすでに10年以上続いている、私がいなくても、変わっても、持続していることです。

さらに6年生は、5年生までに学んだつながりや人間が与えるインパクトや自然の恵を踏まえた上で、未来志向をもち、未来社会を創造します。思考を3次元から4次元にし、未来という時間の軸を入れます。未来を考えるためには過去を学ばなくてはいけない。気仙沼の近くには今も古(いにしえ)の暮らし方が残っています。特に仙台平野、ここも津波に被害を多く受けた地域ですが、いぐね、屋敷林が数多く残っています。そこには、自給自足の循環型の暮らし方が色濃く今でも残っている。大量生産・大量消費の中にいる子どもたちがそこに行って学びます。屋敷の回りに生えている木々の落ち葉や薪を拾って、火を起こして米を炊く。米は周りの田んぼで作った米で、残飯や残灰が出たら畑にまく。そして米や野菜を育てる。木は60年経つとちょうどいい大きさになっていて丁度家の建て替えの時期に使えます。周りの池にはコイがいて、それも食材になるし、残飯は餌にもなる。自然光をいかした、夏涼しく冬あったかい家の作りなど自然を生かし負荷をかけない様々な知恵がある。そういうことを踏まえて、子どもたちは、自分達が無駄に使用していた資源をモニターし、エネルギーを作る大変さとか、川の水質調査をして人間のインパクトを少し体系的に図や地図に表して考えたり、再生エネルギーを考えるなど、持続可能ではないけども、自分達の未来のまちづくりをデザインする。これは、まさしく今、震災復興

の気仙沼に求められていることです。今こそ、やるべきだなと思うんです。震災を踏まえてもう一回考えてもいいです。そういう未来を作るという思考をカリキュラムに落とししていく。マニアックなので、教員の世界かもしれませんが、NPOが支援する時にこういったカリキュラムの価値をわかっていたらいいと思います。

ESDの年間カリキュラムは、面瀬小の4年生の場合、教科・観察・探求、フィールド調査と3つに分け、関連性がわかるようになっています。教科を考えずにESDを総合学習だけで考えるのは厳しい。教科がベースにあって、体験が不足している今の子どもたちには体験学習を行う、その組み合わせが重要だと思います。今の子どもたちは異常にバーチャルの世界、ガラスの中に存在しています。若い先生にもそういう人がいます。お母さんもたくさんいらっしゃいます。虫を触ったことない、畑で野菜育つのを見たことがない、枝豆が大豆になるのを知らない、とか。そういう人がたくさんいますが、そうならないように存分に子どもたちを体験させる。好奇心をどんどんどんどん育てる。それをさらに学習として成立させる。あるいは、学力として育てていく。思考をどんどんどんどん広めて価値観を形成していくためには探求が必要です。ですから、体験のみではダメです。そこが総合的な学習の時間の落とし穴があり反省すべき点です。かといって詰め込みはダメ。体験をもとに探求をしながら、思考活動をどんどん深めていく。それを共感させる。これがスパイラルでぐるぐるぐるぐる回りながら子どもの学力や探求心が高まっていく。これが1つのESDのストーリー作りです。ストーリー作りではなく、ボンボンボンとイベントや体験だけ串のない団子みたいに実践したら、ある意味ではESDにならないし、ある意味では学習として存在しえないだろうと思います。今は環境をメインにした事例でしたが、同じような手法・考え方で、学校ごと、地域ごとの課題をいかし、地域ごとの個性を持った実践でよいのではないかと思います。どの学校へ行っても同じような、金

太郎飴みたいな実践ではおもしろくない。結果的にESDの山に登ればいいのであって、別のアプローチをしてもよい。

環境をテーマに実践していても、国際理解や地産地消、防災と言ったテーマが当然入ってきます。ただ、メインの入口をどこにするか、だけです。鹿折・中井小学校の国際教育はコミュニケーション能力を育てる国際理解教育を実践しています。この学校は留学生を活用した授業をしています。また、気仙沼には外国人のお嫁さんがたくさんいます。単なる外国から来た人、お嫁さんという位置付けではなく、リソースパーソンとして学校にきていただく。そうすることのより、リスペクトされるようになり彼女たちの子どもたちがいじめられなくなります。コミュニケーション能力を高めながら、人とのつながりを育む実践です。

階上小学校ではスローフード学習を実践しています。気仙沼は水産物をはじめ、食材が豊富だと先ほどいいましたが、単なる食育ではなくて、地域の文化面を含めた食育、スローフード学習です。伝統野菜である茶豆を畑で栽培をしたり、自分達で創作料理を作ったり。三国シェフという一流の料理人をお招きして創作料理のコンテストを開催しています。給食に取り入れたりもしています。これも6年間のスパンで実施しています。

気仙沼では市内の全校で防災教育を実施していますが、特に階上中学校は防災教育では非常に進んでいるというか、一所懸命されています。神戸で行われた防災甲子園にも出場しています。中学校なので3年間で経験しながら、自分達で自分達の身を守るような取り組みや地域の昔のことを聞いてみたり、地域のハザードマップを作成したり、防災の救助を消防と一緒にやってみる、また学んだ事をプレゼンテーションしたりなどの実践を行っています。「自助」「共助」「公助」の3年サイクルで学習を進めていますが、今回の震災では、「共に助け合うこと」の重要

性がクローズアップされ、この点を今後の防災教育に取り入れたいと考えます。

月立小学校ではふるさと教育、地域遺産教育を実践しています。地域の遺産、伝統文化や伝統産業、文化財などを活かして地域に立脚して地域をリスペクトする、自分の自尊感情や故郷に対する愛情を育てていく教育です。教育基本法にも盛り込まれましたが、ESDの根本としても重要だと思います。近頃、岩手県の平泉が世界遺産になりました。平泉が文化遺産になれたのは気仙沼のおかげです。気仙沼をはじめ三陸沿岸から金を持って行って金色堂を建築した。そういった歴史を知ることも重要です。

このようにもともと地域に密着したプログラム、地域に根ざすという視点と同時に、やはり広い視野でグローバル、世界とのつながりを感じる内容も必要だと思います。ESDはもともと国連で提案されたものであり、世界で進められている教育ですから、子どもたちがコスモポリタンというか、必ずどこかで世界につながって生きていることを知ることが大切です。例えば、皆さんの生活もそうでしょうし、産業もそうでしょうし、様々な経済活動が外国と結びついています。気仙沼って非常に田舎ですが、漁船だけでなく、いろんな部分で世界とつながっています。気仙沼のフカヒレは、日本一、世界一です。上海や香港のフカヒレはどこのものかという気仙沼です。あるいは水産業には、多くの外国人労働者が来ています。気仙沼の船にはインドネシアの人が乗っていたりするんです。つまり、外国とのつながりなしで社会は成り立つことができない。今も未来も。名古屋でもそうです。トヨタ自動車も生粋の日本人だけが働いているわけではないと思います。ですから、地球市民としてのESDは当然必要です。地球市民を育てるためのESDです。だからこそ、我々はアメリカとコラボレーションしながら進めてきた、もう1つの軸があります。

海外との協働による地球的視野の育成です。岡崎市の教員の方から気仙沼の学校とテレビ会議できないかな、という話をいただきました。実は10年前からアメリカの小学校とやっているのです。時差15時間あります。

韓国やオーストラリアとするのは時差がなく非常にいいのかなと思ったりしますが。そういう距離13000キロ、時差15時間、言語の壁もある中で、やるって意味がどれだけあるのかという疑問符も付きました。実際やってみると、子どもたちは肌の色、目の色、言葉の違いとか関係なく、お互いを自分のパートナー、友達とみて、一生懸命交流するんです。テレビ会議で一度感動したエピソードがあるのですが、最初のオープニングセレモニーで音と映像を届けようと歌を歌って踊りを踊ろうということになりました。インターネットの性能が悪いために音声と踊りがずれてしまうのですが、それでもいいだろうということで実施することにしました。面瀬小学校の子どもたちが英語で歌いたいと英語を練習し、踊りも一生懸命練習しました。アメリカからは、なんと日本語の「さくらさくら」が返ってきました。お互いが相手の言葉を話したいと思うのです。コミュニケーションには3つの要素があります。簡単な要素ですが、一つは目的があること、二つめは目的を達成するためには中身、コンテンツがあること、3つめは意欲、モチベーションがあること、です。この3つが揃わないとコミュニケーションがうまくいかない。我々が学んできたような英語、大学まで英語を習ったにもかかわらず、聞けない、話せないという不幸な状況。私も大変苦勞しています。今の子どもたちはその点をうまくやれば外国の人と小さい時から交流できると思います。

さらに問題は教員です。気仙沼の場合には積極的に海外に出すことにしています。そのためには予算が必要なので文科省やフルブライト基金などのプログラムを活用しています。韓国、中国の教員を招いて、現在も5人ほど韓国に行っています。この夏休みには、ポーランドやスイスにも中学生が行きまし

た。
いろいろな機会をつかって、教員達をどんどん海外に送り込む。できれば中学生や高校生も送り込む。前向きになったり、視野が広がったりして ESD に溶け込みやすくなる。そして、その教員を組織化するのが次の仕事となります。

ESD を地域全体として長いスパン、ホールスクールアプローチ、ホールシティアプローチで実践しようとすると、ある一定の学校の熱意のある教員だけでやっても教員が異動したら継続しない。教員自体も異動した学校で ESD 実践をしていなければ一からの仕切りなおしになってしまう。次の学校ではやりづらい。校長先生が変わるとすべてがなくなってしまふという例もあります。公開研究会というのがありますが、3年間ぐらいテーマをもって研究をしてその成果、授業を公開で行います。素晴らしい取組みがいくつもありますが、それも、その後、長く継続せずにやがて消え去ってしまうこともよくあります。ESD の取組がそうなったら困るとずっと思ってきました。そのために何するか、何が必要なかを常日頃考えていました。

方策として考えたことは、小中高の系統的 ESD プログラムです。その世代にはその世代にフォーカスされる資質能力があると思うのです。小学生には自然の神秘に共感する心、自然への感受性や生命への畏敬が大切だと思うのです。そのためには体験学習や遊びを通して自然と触れ合うことが重要です。そして中学校では、自然から社会へと進化し、環境への知性、環境倫理を学ぶことが重要となります。この世代で倫理観、価値観をしっかりと育まなければいけません。ESD は 21 世紀の道徳といってもいい。そして培った倫理観や価値観を行動に反映させるための探究学習、コミュニケーションが必要です。高校ではさらにグローバルになり地球市民としての行動のための技術や経験を身につけさせる。そのためには批判的思考や世界とのつながり、交流、理解といった学習手法を要します。最終的には、積極的な実

践行動をする人材、持続可能な社会の担い手を育成する。それが系統的 ESD プログラムの目的です。

しかし、系統的に ESD プログラムを実践することはとても大切ですが、実は日本の教育では非常に難しい。絵を描くのは簡単なのですが、粘り強く小中高のラインで対話を続けていかないと実現できません。文化、学校そのものの仕組みが違いますから。そして、実践するためには絶対教員だけでは無理です。外部の人間と人材と交流してリソース、知識ベースをつくらないとだめなんです。そのリソースでまず重要なのが大学です。非常に重要です。専門的な知識を教員も子どもたちも得て、学校教育現場の学習の質が高まります。今までの実践事例で明らかになっています。例えばプログラム作りに貢献していただくと、専門知識や違った視点を取り入れることができます。また教員研修のお手伝いもしていただけます。いろんな資料や情報、資金調達の情報を得ることができます。一緒にシンポジウムを開催し取組を発信することもできます。また、その報告がこのような冊子にまとまります。非常に ESD を進めるには非常に重要なポイントです。

地域の NPO など関係機関と連携も重要です。マグロの料理教室も未来都市ジオラマづくりも牡蠣の養殖も、地元の方々の協力がなければ出来なかった。必要なリソースとアクセスすることによって教員は非常に助けられます。

2005 年 6 月に気仙沼は RCE に認定されました。当時は世界で 7 か所しかなく、日本では仙台広域圏、岡山の 2ヶ所、その後に中部と、現在は 80 何ヶ所に増えてきています。仙台広域圏は仙台、気仙沼、大崎市田尻、白石・七ヶ宿など 4ヶ所が連合体で活動しています。

気仙沼には、専門機関、行政、市と県、企業、メディア、NPO/NGO、学校関係（ユネスコスクール）など 26 機関が参画する気仙沼 ESD/RCE 推進委員会という地域コミッションがあります。年 1 回円卓会議を行い、いろいろとメンバーは変わりますが、文科省

にも参加いただき意見を交わす会議です。気仙沼の推進体制には、公的教育としての、小中高・宮城教育大学を縦にした垂直的リンクと地域へのユネスコスクールなど横展開をする水平的リンク、非公的教育としての知識関連機関や行政、事業者、NPO どの側面的リンクを位置づけています。この図は文部科学省のパンフレットにも掲載されています。

でもこの推進体制を最初から作ろうと思って作ったわけではありません。実際に実践しようとする、絶対教員だけでは無理です。外部の機関や人材と連携して、そのリソース、経験、知識ベースを作らないといけない。地域のいろんなリソースとアクセスして、ボランティアグループやなんかネイチャーグループと一緒に活動したり、料理人を派遣してもらったり、必要なリソースとアクセスすることによって教員が助けられ、ESD 実践が可能になるのです。

ESD の価値とは？ESD の必要性と教育的意義

ここからは、一体この実践を通してどんな効果があったのかということをお話します。その効果をきちんと先生方、管理職、保護者が納得しないと ESD は公的教育に浸透していかない。地球温暖化や酸性雨が問題だと言っても、それはわかるが忙しい教育現場ではそのことを教える授業などやられていないというのが本音です。

教員には目の前の課題がたくさんあります。不登校、引きこもり、いじめ、学校崩壊といった学校が抱える課題があります。社会全体としても秋葉原の事件を思い出していただいたらわかるように、とんでもない、ありえないような犯罪や事件が起きています。この問題には二つの要因が影響していると考えています。

一つはつながりの希薄さ、自然や家族、地域、社会からの疎外、隔絶、つまり関係性が育まれていないという点です。二つめは体験の薄さ、触れ合い、コミュニケーションの不足です。関係性や体験が今の子どもたちの心理的発達、或いは学力、資質能力

に影響しているような気がします。

ESD は広く本質的に捉えることができます。さきほどフローチャートをお見せしましたが、ESD はプロセス学習なので、きちんとしたストーリーが作られ、体験や関係性を補完して実践されています。子どもたちが人生の、自分の成長過程の中で最も多感な時期に、最も大事な経験やつながり、触れ合いを持つことによって、結果的に子どもたちの心の発達に非常にいい影響、心の復元力を培うことになる。くじけそうになったり、悪いことをしそうになっても、分別できる力や思いやりの気持ちが強くでるのではないかと思います。

ESD は地域や関係機関、海外と連携して進める学習なので、いろんな人とパートナーシップをくんで、コラボレーションしながら実践されます。そのことは、開かれた学校教育に直結し、学級づくりや学校経営の質を高めます。開かれた学校というお題目だけでは開かれた学校にならない。学校作り、学校経営を高めましょうといっても駄目です。学校が外に打って出るというか、シェイクハンドをしなければ実現できない。シェイクハンドするためには目的が必要です。何のためにやるのか。それが明確であれば、いろいろな機関を口説くこともできるし、声をかけていただけることもある。ギブ&テイク、ウィンウィンというお互いメリットがあり、お互いが先に進めることがあれば促進します。学校は地域の船ですから。学校が元気になれば、地域も非常に元気になる。学校の周りの、お年寄りも含めていろんな人たちが学校にどう貢献できるかわからないと思っている。ところが ESD を核にしながら進めていけば彼らの関われる場ができ、喜んで自分の生きがいを持って、あるいは自分達の地域として学校との一体化も増してきます。地域に開かれた学校、地域と共に進む学校、地域に信頼される学校として、学校経営が高まり、結果的に地域の再生にもつながります。

ESD は学力の向上につながるのか、よく質問されます。学力と言うと人によって捉え方違うので難しいですが、学ぶ力と言い換えるとすると、ESD はプロセ

スを重視し行動や生き方を考える教育です。ESD は、文部科学省やPISAの国際テストで日本の子どもたちの学力低下が騒がれていますが、いわゆる習得型、反復型の学習ではありません。それも大事でありきちんと実施した上で、さらに日本の子どもたちに不足している課題解決を図る力、学び意欲と目的意識、思考力と判断力、構想力と表現力、行動力と実践力を育むことが重要となり、そのための ESD であるわけです。国際的な主要能力、キーコンピテンシーとして、相互作用の活用能力、人間形成能力、自立的行動能力があります。それはまさに「生きる力」「人間力」の育成です。教育基本法が改正されて、17 条に教育振興基本計画を国は策定しなければならないとうたわれています。それを受けて国は教育振興基本計画を策定しました。その中に法令が定める ESD とキーコンピテンシーは教育基本法の理念と軌を一にすると明記してあります。つまり、国は ESD とキーコンピテンシーはこれからの次世代の子どもと達に非常に重要である、国際的に重要であると言っています。

ESD 実践を通して気仙沼と子どもたちはどう変わってきたか、ESD の取組の成果を知るために、ESD に取り組んであなたの学校の子どもはどのような資質能力で変容がみられましたか、どう変わりましたか、というアンケートを自由形式でとりました。変容した点として、1) 地域・外国の環境、社会とのつながりの認識、2) 自国と他国文化理解と保護の態度、郷土愛、3) 国際的な視野と未来を見通す力、4) 自然への畏敬と感謝の心、環境保全の態度、5) コミュニケーション能力と受容の精神、6) 観察力、表現力、問題解決能力と行動・実践力、7) 危険（災害）を予知する力と回避する力、8) 協働と勤労意欲、社会貢献の態度、があげられました。このことはまさしく、先ほど紹介した抽象的な内容をさらに具体的にしたもの、ESD に求められる価値観、国立教育研究所が ESD に期待される資質能力を 7, 8 項目出していますがそれとも非常に密接です。

皆さんの学校でも色々な取組をした際に、そうい

う点をチェックし評価してみると、実践した内容の良さを訴える時に説得力があるのではないかと思います。もちろん課題も同時にできます。小中学校における ESD 取組の課題について教員にアンケートをした結果ですが、課題についても、実践する前と実践後では課題の質が変わってきます。最初は ESD がわからないといった課題が多いのですが、実践に移ると、地域とどう連携したらいいか、教員研修をどのように実施したらいいか、教科・領域にどう関連性をもたせたらいいか、活動内容をどう精選して吟味したらいいか、といった課題が多くなります。そうやってこそ、本当の課題だと言えると思います。

東日本大震災からの教育復興 ～気仙沼の教育再生と ESD の役割～

最後に気仙沼の今の状況をスライドショー的にお話して、今後について考えていきたいと思っています。

3月11日2時46分に地震があり、人生で体験したことのない、大きさもちろんですが、非常に長く5分くらい揺れていました。いつ止まるんだろう、そのまま地球が壊れてしまうのではないと思うほどでした。その後30分くらい、場所によっては20分くらいたって大津波が押し寄せてきました。これが津波によってやられてしまった浸水地域です。

ここに大島という島があります。波が島を乗り越えて、真っ二つなつた。昔、島が3つに分かれたという伝説がありますが、それは伝説の世界で日本昔話の話だろうと思っていました。ところが、3つまではいかなかったけれど、2つに分かれた。島の両側の海岸から押し寄せた波は、島の中央で2メートル以上の高さに盛り上がったそうです。その他、大谷、岩井崎、階上地域はほぼ全滅。気仙沼市街地も津波でもやられたし、火災でもやられました。大島が防波堤になってかなり防いだのですが、家が密集している市街地の半分くらいが津波でやられました。

今日台風で映像が流れていますが、台風の映像で映る海の波と津波は全く違います。私も経験して初めて分かりました。津波って波と書くけれど波では

ない。海がそのまま 10～20 メートル上がるんです。その最初の部分が波にみえて押し寄せてくる。一回の津波が押し寄せている時間ってどのくらいあると思いますか。ビデオやユーチューブを見るとよくわかるのですが、10分以上です。引くのも10分以上。その間どこまでも波は盛り上がり、水はどんどん入ってくる。防波堤が役に立たないというのはそういうことです。

津波にやられたあと、魚市場付近の市街地が地盤沈下しました。この大谷漁港付近の集落は壊滅し、被災前はここから海が見えなかったけれど、家がなくなり松林が消えたため海が見えるようになりました。地形も変わってしまった。気仙沼港には石油タンクがたくさんあり、津波によってぷかぷか缶詰みたいに浮かんで湾内をただよっていた。そのうちにぶつかって油が漏れて引火して、夕方から火事になりました。東京消防庁も消防車が 50 台ぐらい消火活動に来たのですが、全く手を付けることができず 2 週間ぐらい燃えていました。鹿折地区は海から 1 キロくらい離れた場所なのですが、焼け跡のがれきの上に大きな船が鎮座していました。

学校では緊急対応が迫られました。ライフラインが寸断され、通信網が遮断され、交通網が寸断され、情報がなく、教育委員会とも連絡不能で、誰もあてにできない、孤立した状況でした。自分たちで判断して行動して子どもたちと自分を守るしかない、校長や我々管理職がリーダーシップをとり、子どもたちを避難し守りました。一時避難で校庭に逃げても津波が来る、二次避難で高台に逃げても押し寄せてくる、そして、三次避難で夜寒くて泊まる場所を探しても見つからず、五次避難まで展開したところもあります。

保護者に引き渡す判断や、寒さからの保護、宿泊場所や食料の確保、学校の立地、状況、被害に応じた対応を迫られ、校長はじめ管理職の判断が問われました。カーテンを毛布の代わりにしたり、屋上で逃げて、次の日矢切りの渡しのように脱出したり、

ヘリコプターで吊り上げられたり、まさしくドラマの世界のようでした。

気仙沼向洋高校は大島と反対側の岩井崎に位置し太平洋から何百メートル離れていましたが、校舎が壊滅的な被害を受けました。

グラウンドで野球やサッカーをやっていた生徒は一時避難場所まで走って逃げ、その後そこにも津波が押し寄せてきたので、そこからまた 2 km 離れた二次避難まで逃げました。入試データを守ろうとした教職員は逃げ遅れ、50 名ほどが屋上まで逃げましたが、その校舎より高い津波が押し寄せて来たそうです。「もう自分たちはダメだ」と思ったら、津波が脇を通り抜けて助かったという話を聞きました。次の朝、周りが一面海となった中、流れ着いた船をつかまえて、何回か往復して全員が無事に助かったそうです。ちなみに、この高校の野球部のピッチャーが今年の夏の甲子園で始球式をしました。

この写真は、津波が引いた後の職員室ですが、鉛筆 1 本にいたるまで全部流されました。現在は、2 階と 3 階を使って授業をしています。

これは震災直後、校長が街（学区）にでて状況確認をしたときのものですが、悲惨な状況に涙が止まらなかったとの報告を受けています。そこは、全く別世界になってしまい、学区が崩壊しました。通学街、通勤路、交通手段がなく、教員も最初は学校に来れない、帰れないという状況でした。

私はその時は半島にある小学校にいましたが、リアス式の地形では、道は必ず山を通過して、海を通過するという交通路なので、津波により海岸部で寸断され、全く帰れない状況でした。帰ると今度は学校に来られなくなる。ある学校はすべて車を流されまし、車があってもガソリンがなく車を走らせることができない。何キロも歩いて通勤する先生や自転車で通勤する先生。不通になった線路の上を歩いてくる先生。真っ暗なトンネルを歩いてくる先生。学校に泊まり込む先生。先生自身が被災者にも関わら

ず、教員にはいろいろな要求がありました。学校は避難所となり、物資・燃料不足の中で教員が避難所の運営をしなければいけない。児童生徒の安否確認と教育委員会への報告、支援物資の受入れと配布、職員の交通手段の確保と勤務体制、職員及び家族の安否確認など、学校と避難所の様々な職務を先生方がやらなければならない状況でした。

これは校長室の前の廊下に突っ込んだ自動車ですが、どこからはいつてきたのか。そういった車の片づけも教職員でしました。学校に流れ込んだ泥水の処理も、建設会社にポンプや発電機の協力要請をしたり、地区の方々と一緒に泥だし作業を行ったりしました。

これは私がいた学校の一場面ですが、被災直後、最初に支援の手を差し伸べてくれたのは米軍でした。行政も自治体も来ることができなかったので物資が全然なかった。そんな時ヘリコプターが飛んでいて、すぐに米軍だとわかったので、校庭に大きくヘリポートのⓂの印を描いたら、本当にヘリコプターが降りてきました。この写真はありがたいと言っているように見えますが、実際は、優先してもってきてほしいもののリストを作成し、次に持ってきてほしいものを交渉している写真です。

避難所の様子です。紅白幕が張ってありますが、何故だと思いませんか。市内の中学校全部が、実は次の日が卒業式でした。中井小学校の場合は、単独で卒業式を行いました。体育館が避難所となっており避難民と一緒に卒業式を行った学校も数多くあります。

この次の日が卒業式だったことが一つの不幸を招きました。中学校2年生以下は準備していたので学校にいたのですが、卒業生の3年生は学校からもう帰っていて3年生のうち何人かが犠牲になってしまいました。

こういった状況の中で、我々教育委員会はとにかく早く学校を再開しなければならないというミッションをもちました。教育委員会に戻って一回目の校長会議では様々な意見が出されました。しかし、気

仙沼市教育委員会としてはなるべく早く学校を再開させようということで頑張りました。

課題はたくさんあったのですが、特に大変だったのは、さきほど学区が崩壊したと言いましたが、児童生徒が避難所に散らばってしまい、その児童生徒をどうやって学校に通わせるかということでした。鉄道もなかった。その解決のために、スクールバスを急ぎょ発車させることをと考えました。しかし簡単にスクールバスなんて走らせられないのです。予算の問題もあるし、行政内部での判断がつかない。文科省の課長が来たのでスクールバスを出してほしいと交渉しました。気仙沼の状況を説明し、文科省は支援するつもりがあるのかと直談判をしました。

学校再開が明後日に迫り、スクールバスを出すか出さないかと判断を下すギリギリのタイミングで、OKサインができました。私が路線図を作成しました。

次の課題は給食です。当時、避難所では毎日おにぎり半分とか乾パンのところもありました。子供たちは、学校で給食がなければ1日過ごせないですよね。まして、部活なんてできるわけがないんです。他の市では、パンと牛乳だけの簡易給食で学校を再開したところもありますが、気仙沼は、なるべく早く栄養価の高い、普通の完全給食で始めることを検討しました。調理場の栄養士や職員にヒアリングして交渉したのですが、課題が10も20もできました。物資が調達できない、調理人が炊き出しにとられている、調理場が避難物資でいっぱい、調理場に避難民が土足で入るため衛生上問題がある、とか。でも、こういう状況で子どもたちに給食をださないといけないから、やれないことや課題は聞いて分かったけれど、やれることを考えて始めて欲しいと伝えました。なるべく早く、給食を復帰させるためにいろいろ話し合っ、学校が再開して一週間ぐらいでほぼ完全給食に移行することができました。そしてこの写真がスクールバス、そしてこれが気仙沼中学校に建てられた仮設住宅です。

4月21日、気仙沼は被災地で一番早く、学校を再開しました。再開の決め手は、「やらない、やれない

理由はいくらでもある。でも、学校が始まらなると地域が絶対に動かないし復興に向かわない。ですから、学校はなるべく早く始めるべきであり、そうでないと親も子どもも不安になってしまう」という思いです。

ある程度、復旧するととたんにある時期で復旧のスピードが鈍くなる。ある程度まで来て状況が変わらないのであれば、やるか、やらないか、どちらで考えるかです。さきほどの給食と同じです。そういうことで、不完全の中でしたが学校を再開しました。

その支えになったのが全国からのいろんな支援物資です。名古屋からも沢山いただきました。教育委員会の我々だけではさばききれない量でしたし、他に膨大の業務があつてこの作業をしていたら学校再開のめどがたたない状況だったのですが、東北大学がいち早く支援に入ってくくださったので、支援物資を受け入れる窓口（インターフェイス）をやってほしいと依頼し、学生アランティアが仕分けしてくれることになりました。今でもやってくれています。これはほんの一例です。

アメリカの子どもたちが、写真のようなリストバンドをつくって学校で売ってお金を集め義援金として送付してくれたり、校長が粋な計らいをして、ある金額以上寄付した子どもには、特別に校舎の中で帽子をかぶってもいいという校則に変更したりとか言う話もあります。

また、子ども達に希望や夢をもってもらうために宇宙飛行士の若田さんに来ていただき講演会をしたり、夏休みには、愛知教育大学や福岡教育大学、宮城教育大学から学習支援のための学生ボランティアを派遣していただいたり、夏休みに東北大学がサマースクールを開講したり、文科省が橋渡しをして長野のサマースクールに児童を参加させたり、塩水をかぶった花壇の再生を三菱東京 UFJ 銀行からボランティアを得て行ったりしました。その他にも、20校ほど参加したグリーンウェブ植樹、鳴り砂浜の清掃など、夏休みだけでも10以上のプログラムを、とにかく子どもたちが早く元気になるようにと、復興

への願いを込めて実施しました。

最後のお話ですが、震災からの教育復興におけるESDの役割についてです。一つは、我々がどうESDを機能させたか、機能したか、です。防災といっても、人間の力が有限だと思い知らされました。防ぎきれないものがあります。けれど減災にはなったかと思えます。その証拠に学校管理下で命を落とした子どもは誰ひとりいないのです。確かに、気仙沼でも十数人、犠牲になったり行方不明になったりはしたのですが、その子どもたちは、その日休んだり、不登校であったり、早引きしたり、保護者が引き取ってしまったり、という状況下で、先生が指導した中では誰一人いなかった。また、帰ってしまった子ども、親に引き渡した子供もいましたが生還率が高かったんです。普段からの危機管理能力と判断力が身に付いていたのではないかと思います。

あと、地域と繋がって避難行動を行ったし、避難所経営もできた。地域とのきずなが強いところほど、避難所経営とか避難行動がスムーズにいった。逆に地域とつながりが薄いところは、学校と地域住民がもめたり、学校への要求が多かったり、なかなか仮設住宅に入らなかったり、と避難した後が非常に大変でした。

そして最終的には、未来をデザインし、最終的に未来に希望を持つということ。この悲惨な現状でさえも、この答辞を見ていただければわかるんですが、子どもたちは、震災に対してショックを受けながらも、決して全てを否定するわけではなくて前向きに歩こうとする。こういった子どもたちを育ててこれたのが、もしかすると一番のESDの成果、価値なのではないかと思っています。

階上中学校の卒業式で梶原裕太君という生徒の答辞の内容ですが、まさに未来への志です。これは、NHKのニュースで紹介され、その後、ユーチューブにアップされて何十万、何百万というアクセスがあったそうです。私も、この答辞をOECDの国際セミナーのレセプションでのスピーチで紹介したのですが、

各国の教育大臣含め、関係者が非常に感銘を受け、近頃、文部科学白書にこの全文を載せることが決定したと聞いています。

確かに現在も、悲惨な状況ですけど、全部めげている訳ではなく、前を向いて歩こうと思っています。例えば、11月には全国の小中学校の環境教育の全国大会を被災した学校で開催する予定で準備を進めています。来春1月には韓国の教員を受け入れます。国内のユネスコスクール、海外のユネスコスクールを集めた交流シンポジウムも ACCU と文科省と一緒にを行う予定です。

教育が地域を牽引する、と書きましたが、この教育という言葉は ESD と変えてもいいと思います。復興の旗頭として ESD を進め地域を巻き込んでいけたら、ESD が地域の復興を牽引すると私は思ってやっています。ただ我々教員ができることは限られています。我々のできないことを実現するにはどうしたら

いいか、と考えると、いろんな人たちとつながりを持って、そのつながりのもとに我々が支えられて前に進むということしかないのではないかと思います。学校ができること、協議会ができることは限りがあります。ESD の絆を通して、世界のひとと、国内のひとと、地域のひとと繋がって進めていくことが重要だと思います。

私の拙い話の中から、今後の皆様の教育活動なり、ESD の推進に、もし参考になる点があれば良いなと思います。ありがとうございました。



2008年気仙沼 ESD を取材した際に 唐桑小学校のカキ養殖 (畠山先生) / 気仙沼の港
右下 : 高台から気仙沼の被災について語っていただいた (及川氏×村上氏 (ESD-J 事務局長))

2-1-4. 2005年～2011年ESDムーブメント総括セッション

(1) 何を実現したか ～愛知なごやのポテンシャルの確認

愛知・名古屋で取り組まれているESD・環境学習実践についての情報共有をするために、各カテゴリーゲストから活動の紹介をしていただき、愛知・名古屋のESD実践のポテンシャルを把握した。

[報告者]

カテゴリー	団体名	報告者
ネットワーク	中部ESD拠点協議会	竹内恒夫
	なごや環境大学	加藤正嗣氏
学校教育（高等教育）	愛知県総合教育センター	井中宏史氏
	愛知教育大学	榊原洋子氏
企業	小林クリエイティブ株式会社	池田和広氏
	ブラザー工業株式会社	花木峰生氏
	株式会社フルハン環境総合研究所	浅井豊司氏
	ユニー株式会社	百瀬則子氏
NPO/NGO	中部ESD拠点推進会議	浅田益章氏
行政	愛知県・愛知県教育委員会・名古屋市・名古屋市教育委員会・環境省中部地方環境事務所	

(2) 全員参加ワールドカフェ「2014年までにすべきこと～ロードマップ作成のための素材抽出」

報告者の内容を素材に5つのカテゴリーのカフェに分かれて、2014年までにすべきことについて意見を交わした。

[意見交換論点]

- 1) 2005～2010年まで環境学習・教育、ESDに関してどのような取り組みをされましたか。
 - 2) 2014年までに、環境学習・ESDを地域に定着させるためのどのような取り組みが必要だと思いますか。
- *行政に対して、企業に対して、高等機関・学校に対して、ご自身に対して

カフェ	団体名	担当者名
ネットワーク	中部ESD拠点協議会	竹内恒夫
	なごや環境大学	加藤正嗣氏
	オーナー	古澤礼太・脇田夏貴氏
学校教育（高等教育）	愛知県総合教育センター	井中宏史氏
	愛知教育大学	榊原洋子氏
	オーナー	榊田敏宏氏
企業	小林クリエイティブ株式会社	池田和広氏
	ブラザー工業株式会社	花木峰生氏
	株式会社フルハン環境総合研究所	浅井豊司氏
	ユニー株式会社	百瀬則子氏

	オーナー	吉澤 卓氏
NPO/NGO	中部 ESD 拠点推進会議	浅田益章氏
	オーナー	桜井温子氏
行政	愛知県・愛知県教育委員会・名古屋市・名古屋市教育委員会・環境省中部地方環境事務所	
	オーナー	高木丈子氏

(3) 報告

■ネットワーク / 脇田 夏貴氏

ネットワークとはなんだ、という話をしました。ネットワークは、いろんなセクターが関わり合って一緒に何かを作りあげていこうというものです。生物多様性を大事にしている人たちとまちの開発をすすめる人たち、電力会社と反原発の意見を持っている方など、なかなか理解し合えないこともあるけれど、お互い本気になって意見を交わし、方策を考える場をつくる役割があるのでは、といったことが話されました。ESD に関しては震災から多くの人々の価値観が変わったという状況のもの、ESD 拠点がより力を持って発展し、支え合って、みんな頑張っていきたい、といった意見が交わされました。

目指すべき方向：2014 年までにネットワーク拠点として力をつける。

震災も踏まえ早急にロードマップを描く。

■NPO/NGO / 桜井 温子氏

すでに社会では ESD 的な教育が実践されている、自分たちも実践している、ことを確認し、実践している仲間をもっと増やすにはどうしたらいいのかについて意見を交わしました。2014 年に向けて、今すでに実践している人だけが実践するのではなく、今を深めるためにも、多くの人に理解していただくためにも、どうやったらもっと伝わるのか、ということに話の焦点が当たりました。1 つは一般向けにもっとマスコミを上手に巻き込んで一緒に普及啓発できないかということがあがり、もっと目に触れたり、見て感じるとか、体感するような、言葉だけじゃない ESD の体験の機会が作れないかという話がありました。音楽や演劇など芸術関係の方とも一緒に連携するとか、ESD の内容はわからないけどなんか聞いたことがある、という感じで広められないかという話になりました。もう 1 つは ESD という言葉を使わずに、言葉に頼らないで実践できないか、という話でした。学校現場の総合学習が体験のみで終わりがちなのもっと深めるにはどうすればよいのかという意見や、そこまでやれないという教員の意見が出され、教員を支援する体制づくりや、失敗をしながらふりかえりつつ内容を高めてはどうか、という話になりました。今回の震災を契機に、価値観の転換を自分たちの活動に取り込み、多くの人を巻き込む活動を展開することが重要であることを共有しました。

目指すべき方向：わかりやすく伝えつながる。マスメディアの活用、音楽・演劇など芸術領域との連携など。

自分の活動を伝えすべきことを実践しつながりを拡大する。

■学校教育 / 榎田 敏宏氏

今日参加されている教員の方は非常に前向きで、学校教育はこのままではいけない、地域とか地元企業とか行政と繋がる、小中高繋がる、地域と繋がる、いろんな NPO 団体と繋がる、そしていろんな学びを作っていくなくてはならない、ということが話されました。そして ESD で育った子どもの姿をみたい、そんな話が出ました。課題としては、つながりたいけどつながる方法がない、ということがあげられました。

次に NPO の団体の方等が加わって、ミュージカルを作って子どもたちにわかりやすく伝えたい、実際の現場で実体験をしてほしい、モリコロパークにはいろいろなプログラムがあるから使ってほしい、といった意見が出されました。団体の方々の学校と繋がりたいという思いが伝わってきました。教員からは外部講師を招くときにはどのような位置付けなのか明らかにする必要があります、と意見がでました。

最後のセッションは、企業の方から企業にはいろんな学習プログラムがあるからぜひ使って下さいという話があり、教員からは、理科や環境教育だけではなくいろんな教科で地域ごとに取り組むようにしなければいけない、総合学習を充実させたい、という話がありました。

全体を通して、学校と外部の方をつなげることの重要性に気づきました。つなげる役割は、中部 ESD 拠点や EPO 中部、行政の仕事になると思うのですが、つなぎ方が大事だということを感じました。

最後に、学校は HOW TO ばかり教えているのではなく、及川先生の話にもありましたが、探求型の重要性を確認しました。

目指すべき方向：

地域・企業・行政の「人・モノ・コト」がふんだんに生かされた探究型のワークショップ的授業の実施と地域データベースの構築（総合学習の充実）。

■企業 / 吉澤 卓氏

企業の方は、他のセクターの方と少し言葉が違うと感じているので、違いを乗り越える、埋めるための場が必要だということが話されました。そしてつなげる仕組みがあったらいいと改めて話されました。その後、教員の方から、学校側から見ると企業 CSR の取組である出前講座はすごくありがたいが、ESD になると地域性に立脚しなければならないのでプログラムがもっといいものになっていくといいですね、といった話もありました。共通して出されたのは他のグループにもありましたが、コーディネートや仕組み、結ぶ仕組みが必要ということです。特に企業の方と学校を結ぶ具体的な仕組みがあればいいと意見がでました。そのためにも、ダイアログをもっと実施し違いを認識しあうことが 2014 年に向けて重要であるという意見もありました。後は、行政の仕組みを使ってもうまく支えてほしいという声いろんな方から繰り返し出ていました。

いろんな方が取組をしている、そしてここに集まられている、いろんな方のいろんな接点ができているので対話をもっと成熟させていくと次が見えてくると思います。あと、CSR という言葉自体をもっと理解する、そんなことも必要かと思いました。

目指すべき方向：

企業 CSR と教育を結ぶ仕組みと結ぶコーディネーターの育成
違いを認識するダイアログの実施とその成熟
政策によって仕組みを支え、企業と学校の連携実践を拡大する
CSR を理解する場の提供

■行政 / 高木 丈子氏

ESD をわかりやすく伝えることが必要ではないかという話が多かった。行政が ESD を普及させていくためには、横のつながりつくらないといけない、という認識を持っていらっしゃいました。2014 年までにできるといいと話しました。

教員や NPO の方が加わり、行政の役割って何だろうと考えた時に、コーディネート役になる、人と人をつなげる場所をもう少しやるべきではないだろうか、と行政の方が発言されました。

他に出された意見は大きく三つあり、一つは ESD をもう少しわかりやすくするためのツールづくりを行政が担えばいいのではないだろうか、という点。二つめは、人をつなげるだけでなく、もう少し組合せをしたり、コーディネートの役割を担ったり、フィールドを提供したり、いろんなパターンのもものが 14 年までに取り組むべきものだとして考えられる、という点。三つめは行政の中での横のつながりや行政内部での人材の育成、人が異動すると今まで積み上げていたものが活用しにくくなるといったことを避けるための仕組みづくり、です。さらには教育委員会と行政組織との交流を深めて学校教育へ切り込んでいくこと。そうすれば、市民の方や企業の方が学校での実践がしやすくなるのではないかという話がありました。

目指すべき方向：

E S D をわかりやすく伝える、そのためのツールをつくる。

行政内の横のつながりをつくる。

コーディネート役になり、人をつなげ、フィールドを提供する。

行政内部での人材育成を実施し、成果を積み重ねる。

教育委員会と行政組織の交流を深めて学校教育に切り込む。

2-1-5. 今後に向けて

愛知・名古屋のポテンシャル、ワールドカフェで話された内容を踏まえ、アドバイザーの及川幸彦氏からのコメントをいただいた。環境省事業であるプラス ESD 事業の活用方法についての紹介をした。

(1) 及川幸彦氏よりメッセージ

みなさん、ご苦労さまでした。まず率直な感想ですが、非常にアクティブな意見交換というか、高く評価したいのは皆さんの熱意と共にこういう場が 1 つできたということです。たぶん、聞くところによると、今日初めて会ったという人が多いですよ。多様な実践する方々が一堂に会して、こうやって熱い意見交換するというのがまず第一歩かなと思います。そういう意味で非常にうらやましい。仙台広域圏ではこのような場はなかなかないので、中部名古屋の皆さんの非常な熱意と共に、これからの方向性の確かさをまず感じました。

それで、私から大きく 2 点感想を含めてお話しします。一つは、まず今日の大きなテーマであった、**パートナーシップ、連携**の話です。その点に関して確認されたことがはっきり 2 点あります。企業や大学が連携リソースというか、色々なリソースを持っていることは確かになりました。そのリソースを整理してみると、1 つは講師を含め人材の派遣や教材の提供がある。教材に限らず、セットではなくて実際にオーガナイズも含めたプログラムとして提供できるという人もあれば、あるいはコンサルタントみたいなという機能を果たせるという団体もある。**ESD 推進のための諸経費、物品、経費、資金提供が非常に大切です。**それから**活動場所や学習場所の提供。**一言で**連携できます**と言っても、**いろんな種類**があります。その種類をきちんと提供する方もされる方も使う方もきちんと認識するべきだろうということです。

もう 1 つ確認できたことは、学校側は**学校外部からいろいろな支援をいただきたい**と思っているということ、です。連携、つながりを持ちたいという思い、熱意があることが確認できました。それが学校、その後ろには当然子どもがいますから、

子どものニーズと言っていいのかもしれませんが。そして今日は参加がありませんでしたが、**PTA、保護者のニーズ**もあるし、あるいは市民、学校以外の**地域の方々のニーズ**も当然あります。

でも、**なぜうまく出会わないか**と、いうことが問題です。それが今日の大きなテーマです。両方とも思いはある。いろいろ実践できそう、やってみようという思いはある。あるいは必要だという思いはある。でもなかなかうまくいかない。その間には**機能が必要**だと思います。それが多分、今日ネットワークというセッションを作った意図だと思いますが、要は**2 つをマッチングさせる機能が必要**だということです。マッチングを誰が担うかということ、中部 ESD 拠点協議会、なごや環境委大学、そして大学。大学もそろそろ地域貢献というのであればそういう役割を担っていかなければいけない。宮城教育大学とは連携協定を気仙沼と結んで、我々は連携センターを作りました。あまりお金はないのですが、そういう機能を作りました。

それから、教育委員会は学校に対して非常に強い権限を持っています(ないところもありますが、普通はありますよね)。**教育委員会の影響力**は結構あると思います。あるいは市民に対しては**行政**です。環境部は非常に影響力があると思うのでそれぞれの得意分野を活かして、**コーディネート機能**を果たさないといけない。

ただ、組織と機能があってもなかなか難しい。**ニーズをすり合わせる**ということで、環境省が進めている**プラス ESD プロジェクト**などを活用しては、と思います。プラス ESD プロジェクトはうまくマッチングさせる機能をもたせようと始めたという意図があります。学校も市民団体も、こうい

うニーズが欲しい、我々はこういう活動を目指してこう言う主旨で活動するのでこういうニーズが欲しい、私たちはこういう提供ができます、支援提供ができます、といった内容をHPに掲載したりして、出会うプラットフォームみたいな場を作るといふ大きな意図がありました。愛知名古屋は可能だと思えます。これだけの人が集まるのですから、ぜひ、今後チャレンジしていただきたい。これだけのポテンシャルがあつて、これだけの方々の参画意識があるのであれば、そういった場ができ、一気に連携が進むのではないかと思ったりします。

あと大事なことは経験上ですが、**組織だけ作っても動かない**です。やっぱり、**最終的には人**です。例えば色々な支援、大学のプログラムや企業のプログラムを橋渡しする役割、**アウトリーチが必要**です。そういう人材を育てないといけません。私もたまに大学で教えますけれどその辺りが上手いかなと繋がりません。逆に学校も、そういった上手い話や上手いネタにきちっとアンテナを高くして捕まえられるキーパーソンの教員を育成しないといけません。つまり**お互いに手を出せる手を作らない**といけません。手を結ばせる間に、仲人役の中間支援組織が必要です。手を出さないことには始まらないので、その部分は必要だと思いました。

もう一点ですが、2014年の最終会合の開催地に愛知名古屋が立候補している部分について、ESDの普及推進について、お話しします。名古屋は地球博、COP10を開催し非常に実績があり、王道を歩いている地域だと思います。そして2014年に向けESD最終会合の開催地誘致に手を挙げた。まもなく結果がでるでしょうけれど、2014年に誘致したとして、**愛知名古屋の地域でのESD、学校を含めた地域全体のESDの取組のポテンシャルが上がっていくことが期待される**わけです。一つは、**ポテンシャルを記録し普及**していかなくてはいけないということです。学校で、企業でESDが取り組まれているかなければならない。特定の学校だけではなくて、ESDが取り組まれているかなければならない。

どうすれば多くの学校で取り組まれるか、さきほどもどこかで話が出ていましたが、これ以上忙しくてESDどころではないといった話があります。これはどこの学校でも出てくる課題です。私も現場にいたのでわかります。でも考え方を少し変えて、プラスESDと考えるかどうかの問題で、プラスというよりは、**今までやってきた取組を最大限に活かす**という**発想**で、ESDの視点でもう一回再構築すると考えてみるのが重要なことです。ESDの視点で組み直すことで、無駄な労力を使わないでESDに切り替えていくという視点で、学校教育なり、企業なり、市民活動やNPOが取組を考えていってはどうか。すでに実践されたことを組み返す作業をただけなので、あれだけユネスコスクールが増えたのです。新たにプラスアルファでやっていたら嫌がって誰も受けないと思います。

もう1つはこれも確かですが、**子どもの変わる姿や市民の変わる姿を見たい**、特に子どもの変わる姿を見せたい、というのはその通りだと思います。これは私の永遠のテーマですが、**その時にその場を評価する**、ことです。プレゼンの時に言いましたが、発信する時は短期的に変わる部分もあります。例えば、知的好奇心であったり、知的自然へのいろんな親しみであったり、表現力であったり、こういう短期的なスパンで変わります。その部分は切り分けて考え、**短期**で変わる部分はどんどん出して、長くかかる部分は時間をかけて、**長期的に実践**すると発信していけばいい。これだけの大きい団体で、地球博も開催した愛知名古屋ですからPRの仕方、ノウハウはご存知でしょう。上手くやっていかれたらいいと思いました。

最後に少し癪に障ることを言うかもしれませんが、ESDの最終会合は世界大会であり、ユネスコが主導して進めています。そこを考えた時に2014年には名古屋はかなりのユネスコスクールを持っていないといけません。そういった目標値も含めて、**トップダウンとボトムアップ**をうま

く組み合わせですすめていただきたい。トップダウン絶対に必要です。でもそれだけではうまくいかない。そのためにボトムアップとの両方です。我々はトップダウン使います。でも学校で色々実践して、その成果を吸い上げて、色々研究したり、その発表したりもしています。

市レベルでもこうだからこれだけ愛知名古屋と

広域になれば、なおさらその間がつなぐためには両方のアプローチがないとまわっていかないので行政や高等教育機関に担っていただきたい。学校の先生方は頑張っって自分の実践を膨らまして学校全体に輪を広げてボトムアップで頑張っっていただければ上手く繋がって質が高まります。

(2) +ESD とは 吉澤卓氏 (NPO 法人持続可能な開発のための教育推進会議理事)

プラス ESD とは、環境省の事業でウェブサイトにて ESD 活動のいろんな情報を登録していただく、そして、年に 1 回「学びあいフォーラム」といって登録いただいた方々がつながって学びあうような場を作る、この 2 つの事業をプラス ESD プロジェクトと言っています。このウェブサイトをご存知でしょうか (<http://www.p-esd.go.jp/top.html> を参照)。今年の 2 月に始まった仕組みですが、環境省ですが、普及委員会を設置して推進しています。

全国の地域にポテンシャルがあります。そのポテンシャルをていねいに多くの人に示していく必要があります。このプロジェクトのサイトに登録する時、そういうていねいな情報を入れていただくとお互いがかりあえやすくなります。そんなつもりで作った仕組みです。ポテンシャルをお持ちの皆さんに登録いただき、活動を発表していただき、さらにネットワークを拡大していただきたい。このサイトをぜひ活用していただきたいと思います。

この仕組みについては、ESD-J の事務局がプロジェクト推進の事務局を担当しておりますので、気軽にお問い合わせください。私たちの活動を登録していいのか、どう登録すればよいのかなどお気軽にお問い合わせください。

(3) 主催者まとめ

長い時間ありがとうございました。及川先生、本当にありがとうございました。今日の議論の成果をまとめ、2014 年までの、それ以降を見据えたロードマップ作成のためのダイアログの企画に入りたいと思います。ダイアログは継続していきたいと考えています。ぜひ皆さん引き続きご参加ください。

2-2. 業務総括

本フォーラムの成果は大きく3つである。

- 1) 国内の ESD 先進事例である気仙沼の取り組み、特に東日本大震災を経験しての ESD に対する価値観、考え方を伺うことができたこと
- 2) 多様なセクター（教員、教育委員会、大学、企業、行政、NPO, 中間支援組織）が集結し、それぞれの知見や経験、ノウハウを共有できたこと
- 3) 2014 年に向けて、各セクターもしくは協働すべきことを協議できたこと、である。

本地域において、ESD の取り組みは、多様な主体にかなり行われていると認識している。

ただ各セクターがそれぞれに実施しており、協働、融合して実施することによって、社会や地域への影響力が高まっていくと考える。今回のフォーラムでは、あらためて、お互いのポテンシャルを共有し、補完しあい ESD 実践を活性化する第 1 歩を踏み出せた。

この地域の ESD 拠点である、中部 ESD 拠点協議会などリーダーシップをもつ組織とコミュニケーションをとり、役割を分担し、各セクターのポテンシャルをより有効に活かすため、今後 EPO がすべき事業を展開していく。

平成 23 年度中部環境パートナーシップオフィス運営業務
E S D 関係事業報告書
平成 23 年度 ESD フォーラム 2011
「2014 年に向けていかに歩むか」実施報告書

平成 24 年 3 月

事業委託 環境省中部地方環境事務所

事業受託 特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ

リサイクル適性の表示：印刷用の紙にリサイクルできます

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料 [A ランク] のみを用いて作製しています。